惠好集

伊地知文庫
文庫20
269

家集事

歌身事

不可定之多女隨意

或十六首或七百九拾首三百余首ヲ念

思ニ也

長齊連歌ハ相交贈答勿論也

又非贈答他人ニ寄隨便

多書我ニ

非立事

全不有之雖有分戸人可懇也耳

卷以事

此者ニ

無戸立ニ上者可任意在ハ雖ハ

伊地知文庫
景福文庫
文庫20 269

又秋冬の部之
表備旁事
自巻頭至十五番書之 忠岑集并筆事
以日記 柳桜長書續
又哥合判詞是非故實未以次書之事具
於学者中之事也
右上得此意可書之

この色紙
わかれを行つ
の羽はらひ戯
みなしくも
続ちよの
へ

原山まそし流ゐて ゆふかのゝ 逢坂の関
をかえ ―― よ
雲乃多き 右まも いかゞ 逢坂の雲ちは亀の ゆふあの
逢坂の雲の ここ風の上より 来る ゆ 夕月
雲の中白ろ ろゆ子たの中納言殿より
詠みてと 名目殺も ゐ 雲に 其流 ある 其流るゝ
流雲に 里の かれて 詠歌に 続乃人の 枝まで
か
――
詠歌天冬ち七こ つゝ 其事 編乃 歌伯 八延の 白雲
天の河 七月七日月乃 ことを
七月 ゆく月 かゝる も 雨 かけよ 雨み
よぬ たいけり 其 まくさ
十六乃よ 其 ぬの山の よ 二島 九武 尾 まと 里い 社 其れ

[illegible]勤寺にて夏[illegible]
[illegible]きこゆるのうぐいすの[illegible]
祭の日にてまつりの[illegible]
中[illegible]の事[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

我[illegible]
[illegible]草[illegible]
夜[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

久[illegible]
[illegible]
いま[illegible]
か[illegible]
[illegible]
法[illegible]寺[illegible]
[illegible]
法[illegible]
[illegible]
[illegible]
大[illegible]
小[illegible]
[illegible]
[illegible]

てんあしこ離の花をおりて佛にさゝけ
供養しまゐらせおりしかは
むかし最まうさの花を露なりしもかれ人今もよもの
なもいの名まて無常のまゝにそてにたえ
はるをもとむ人さすらひて
聖りなく花となりいの是の色に哀しくよ風にやさしき
舍阿弥のこゝろみておりけるからむ空しき
てりはてぬるを
もみなりてゆりまたはてもあたら宮城にさとさる思ひ
かへし
歎きいともまさりて此みちよりもそのみち法に
山里のすまひは澗ことく　あなかしこ宿
さひしさもなからいまかりな山里にといまる　いとゝりをき

こゝろらく一ふし年ありて都にあて
ふへり都にてこれなるすまぬうちは
法花経序品
流るゝものゝ過きて洩るゝ花は
衆生宅応身まゐりて道白に結縁経
斉すゝめ給しまゝ方便品に
ましあへていとゝあいの花をとしまゝ年をあらん　一乙智
五百弟子品乃心を
受衣のかりにあかめかりまてころめ此補の玉をそつ
中御門入道大納言経継白河の山荘
五てたまゝれ記をさそりて斉すゝめ給
衰病を
あさ人今なりはてゆくのきて若此のなりは

八月十五夜報恩寺にて人々あまた寄
よもすがら御遊び都ふ事ありてえま
して月詠みける御かし
月まうでに詣でし娘まりかはるもなさりてかよふ心とけき
如件かへし
り添しに詠せず秋霜風にも月雁
その比やさしとなき人の言ひすさみかへにも
忘られぬる露の命は深き子とすまひは神事ありて
たすけいとうてためもぬ男のあつめぬこともまゐり
まれは女のよすがを得
たのまれおもひ残りを我もとてかれなき昔を語り
冬の夜の嵐に雨の音すさまじく嘆かけて
本寺のさき松のこゑまでもくまなくとりかへ

月をみて暁まで物語し侍る人々よ
おりしもやむ風ふき寒さへて松の葉に月さらに
世をうらみし人にもおりしも立し比社の中に今年
そむきて八重のかさにあらはれ秋の夕しはらくうき
世をてかくすは最中のこゝろあはれは
ほにも世あはれの玉のをかせは世のうき程にはかなき
ましみえしおもひて清月をあひまち
うきあはれ迄り世の中を厭ひことはるとも絶え難
そのゆふあはれて雪もいとゝ袖ぬれ侍り
たのむや命とも人の心をみてもおもはれぬ世を秋をは
おもしの山乃花をみて
大井川そこすいつしやさしきおもひやかるの波もそよらん
梅の花をと

こゝもあるなあぬるいは池にはまらぬ梅の下せ
木の下さへてそこらにきこえる桜梅の香は
三月ハいりすはしとはりしとされ
さつ雨の時と
あつし桃は花は清てかれしへまぬるいにさてに
かしら花は花の限と言まるをさぬるて月日あらん
やなきと
楊最なとかしは柳は三ふ代なれかへん流るも
きあに柳は式はは湊けは花の緑かやもを云ん
世の中おもいおもの内は心里にある
あるをとて
世乃中の秋田るまて名あれは家も新あもを
人もものいいそめて

かよふへきんなつねは云わてやさわらもふらて人やゆかん
やまくなわゆく人と
いまはうよかろう契りめてとふたこらへ人なさるにあるには
定ろくにていこらう世のおかさを
あるまことさの母まをふかやいな定ぬ世の世まへい
もすれは婦めうきすはきあう氷く凪てぬ世と説
世をのれて本曽語と云ふやてこし
おもいきぬその流にぬあさく見はれめてやしなき神の名には
保学院と云所にはあり侍しちら
のれてしせ来のかわれのかねは世よいまくれにか成けるかき
何様あるかまそてきて浮世するなは物のかみふ梅
あかくすうさ世の外いあきをしてのれ物ふ心なるわ
いかあしてあらし物そ世の中そそてもつてとす人まさるや

花をみて
花ちるは公風まかせになれなき事まけを世といふ無常にた
後二条院乃世おほんおほせのことに法
給へせのしもしとて女院わかくよよませ
侍しに　夢違ゑ
うらミけてまさるもしもあらぬ物とあまとみや現まで
侍従為藤殿よりて人の頭をかりて
弁まかり侍しにまた成ありけれは宮
山城の梢まるやありけん日新て花の桂のしたに露
は花乃雲と
山さとの風の花の宮あとやあさきこの衣にありの白雲
蔣善坊湛
わけゆく雲路の末にかゝるもかゝる都よかすかに見ゆる人の袖

此歌忘恋の哉とてハちとよみたるへし
わすれ恋
五月まて花橘のあるへし山本ときすきぬる日ハなし
横河よりの侍　此霊山院にて供
乃式といふ事侍しおりにかきはへく
うかむ花の便とも来るを此説きくへきを世の人
持ありおりさ佛に奉りてかきはへし
法様にすむ深山の月よりもあらはなる雨の風ならんやとおもふ
堂のむしろにはふれそはひ世の三位の女
御大臣経供養のかりて筆ひきけら
よしかきて
ひとりねと衣さこそ身を世まて所々の松の松風
心うきはなれをまくらのつゆりてさえよ
衣のもも袖ばかりはしかゝるに

松風とそなへたるさまにしてはなはだ
堀川のおとゝいまし君とていとのふかれ
おさめあてまつりあつめたるのさとのさとり
さらいをそりて南海の日はかつまれ
ちるものもいつくしきをきてそれ清麿はいとせ
かへ
みるまにおそはれぬるはけ清みもはれ沢ふく
人をとりて仏の事をいとなむし
さうしてはいとおもしろ物をはしめ海よまの
東のまゝ侍しまは清軍寺よりて道
我信都をもてれハかりまうてくつ
のゝ侍うの僧都
浪ちの命をもせかりあへ放ちもせめて奥をも海

かへ
ゆるすに余をもはなはだ感きれ
東あて宮はしりわ富士山をち
ぬ海もこて
都あて見い屋まりぬ根をはしはる雪もてら
海はしりてはいとのかるゝ苦かとめ乃
あそぬとこて
大なる波してそなるゝ沖めのこのにて
はるゝ月とこて
はるゝ月の後とこ
はるゝ月の後はるゝ
むさしはしを合浦と
いぬ一ぬ
きぬ

姫の宮は清水の庵の家は世に家の名も世の人
はうこそは思いいらしと立ちのみてはさしら
ぬ名をのかれかたにはたへて袖のしをれ
いとこそ立ち日もわもりぬてはるをとこ
もくしみて関あて
清見がせ海しはるるに日の関もをさまる世の原
ねこの浦みて
思ふ世をのもしぬ海の藻はなれ
いとせよに入てうつ
かい藻ありあやし世の者もよ立入侍かとう
をしいうの者ていこ家へ
下の浦やや見なれも見ぬ海の
さてうもあるぬやしうきとまれい

すめ父うき世にあるなく穴しまぬ世里もる
何とうなく無のすて世なるうき我身ゆん
山ひとは恒なの高人今更よ立ていすて世を恨う
うこそ成りしはまはりはりはりはりてかりて
人めりの又ものよりそれはそれの月日はりぬ
まる
我うはなるこはなりぬあにの貧乏のるはるうて
絶切恋と立ちまと
はすて立てこしも命も生きるに世はかるう我身ぞう
雲よりすう立ちと
屋はなるはるうはるうはるうはるうはるうはる
ぬはこ来しはるうはるうはるうはるうはる
辛しなぬはてや初せの立ぬ

かのえさる

ちゝはゝそなたにて小男鹿の名ゝとゝきてとゝきて来らん

五月九日比御子尼中納言殿乃度申に

郭公声旧　　田早苗

閑中五月雨　　深草夏月

風雨夏草　　雲大秋近

くゝりもりはてに

ゆくすゑも松にてあれぬ初ほとゝぎす月は日数ぬる声

水無月の日ゝのさゝなる多くて梅ふる山は陸たるとは

なれもぬ心の友とあるあてもなく五月雨そ

更ぬるもとけ物と宵なゝはぬるゝ夜月新

うちなびくゝ草葉すゝ　夜明のうけ物こゝにぬ

花雲さゝたけはなぬ宮ゝわりかゝれと見やゝ

入道大納言殿みて九月十三夜水海にて月

氷てゝ仰てわと云事を

湖海乃氷はなれ雲ゝ　ゆ月の月

恨意

かたりもりかゝ恨ゝ　ゆとなりいとゝ

祈てゝ　ゆ恨ゝ

ゝゝ　ゆ恨ゝ

ゝゝ　ゆ恨ゝ

鹿乃声を　　云事を

秋山乃すゝ草むゝ　　我ゝ　ゆゝ

山家

ゝゝ　ゆ恨ゝ

山深ゝ　　島崎

後ゝ　ゆ多院ゝ

奉りて侍りて僧正道祐はけうけ
人きれすれすれてぬさとのみたちぬぬ風のあん
かへし　僧正道祐
さとりや天津そよりいかるせよ花乃末葉をまつさきも
神世月乃比初開まして行ゝに入道大
他云ぬ葉ありてさてとかいせ弥ゝかゝ見てさき
枝よむてゝありかゝてゝさせあもて道す
かゝ旨あをゝうとあてまつ所として
世にさすみゝ情の初開山君よかゝ山桜色
かへし
さりけの初開ゝ折ゝ葉にまさら君さと
正中二年春宮にしり弁合式部奇ゝれ侍
ゝ山花花佛　色忘

春風もまゝりて桜花あまそゝ山ゝ衣袖白ゝて
いつまてもことゝゝひよおゝて心おゝ心世とすゝ
民部卿殿ゝ
寄木　立春
たゝもせぬ君ハ花をゝかりさゝ一今ゝ春風ゝ
ちゝひ
今も又ゝゝゝゝ時ゝ山野ゝゝのさゝい
帰雁
かへ所ゝ春ゝ雁ゝ山のゝ空ゝ所ゝ春ゝて
ちゝれ桜花
限ゝ返ゝ春ゝ桜ゝ山花ゝゝゝ

初かりとき次
みやまに家梅と郭公宿こ姫ちや物言ふ
五月雨　最上川之一章一可俳珠
○りかこ河ちやくてまさら天雲のちれ〳〵ちつ青葉城
泉　法和井大原だより　俳高樂の俳句こ〳〵
○月やとうせうの水のすましけるなほ姫ぬよしいて名月
蘭
藤さく田野原賦家ちくるて泥ぬき拾て白いあるん
猶定
いあ〳〵いこの四やこしい陸こ来て坂の月鶏
松出
秋毛ま鶏乃屋ちや松出代名ま風こて言を言ふて
梅大

埋大城ちり春と嶺ちの代の人〳〵猶や内ちる
紐代
小梅さ今こに拾ん姫八十こ流の紐代比
宇宮恵
白宮乃方ふ寺代ちの滝さ法て や後ち嶺
宇野恵
契あ人文や拾ちん市事の新市拾代野のちま
宇橋恵
市ちふ市ちる立ち山面さ市ちの面に芋いまよち橋のけ
延政門院一条乃時ちたりてあるさ
ふ立入ちちりやおこて
ありいやれちちやみて苦を恵ふ彼ま
か〳〵

西はらん昔にかへる世中はあれぬ物そやみ行方のこかは
こゝへ乃山みて四月十日あまりほとはらなる花
をミて
今も咲花乃下ハおもなき色あり春とさぬるてなき
人まちまてしこ椰し比なん／＼の梅ゆへ
思ふ来て世中乃はとしもこいとふらむさ
年ゆきハこひぬへもなわきそら世のかとてと思ふと
されとも枕ぬるゝこゝろとおもし
山里ハさそれぬわしもこゝろへのかりて後そはふらむ
いかなるおりにかこゝにをいうけしおもく
あわれ咲こむやま藤乃花をあるまへこてもあるらん
おかしの清水をとゝりて
大原やいつれおかしの流大きてまつ秋ハすめる月か

たしかへの三首・猿手・ちかく・咲宿・

あきさ西へ行／＼まさにうけすとて
おもひなき身なき持たて袖ハ露さかる旅そなり
藤原行朝すゝめ侍りしまかれ社の前
子親なる松ハ橘乃白くかゝりなむ秋／＼のあたすれ
月やとる露乃花なくこそおもて此白秋風そ吹
らせさやく岸乃名萱はけ社ハ埋れて露ハ涼しけ
こゝとすもにいとふかく心あまりしと思ひも神楽をもせ

京東語り大の河孫霊

春日野の露かゝる梅か東路の道のえてよか月け
若衆や天て神乃みせそけて西海うけ水そ鉢
斎そとよみをりてかまゝりまけるへの近若
たの斎此一字をたてしめにおもてまちなし
御乃歌すゝめ侍りまる文字
流情をなんへとこれすハせ流乃石やこよせる

柏原に住せす（さるじて流せつゆめてゆめ
舟しあれいるこ川乃石もうかぬて根の海に浪乃
立来白れくゝ波と云事とかくて
いて我もろ代ゆめ世れて うめ はまてゝけてすん
宇治乃御絶蔵乃流ありかてきて人
乃のれてしわ
かつきぬ世あ世ぬあまかりあぬ恋れてせきや
らじとぬてこれたさ波とてうらて流て
まおしくいかぬわ
うこしまきもかつて 被めれて 蔵てくる
厚風乃侍ぬ道と厚留て居ところ
いとこやも毋芋てなわ宇治を通て 宝なる石の波
九月十三夜大黄寺二月親王まわれ

三首寄よ　寄月待恋
立石乃尾上をゆる月乃これにさの居柳の
藤原基任朝臣
もろに
海宮に遊ぶ女の心海辺なる人を
きぬぬて船まとあり海宮に御なる紅に
松井乃三宮めて寄月かしまろに
すこしぬと　第宝
炭竈之歌
如猿猴登之木
炭竈もを焼しきに屋の煙や松の風乃南乃
正月十二日春立日民家つゝ都の庚
申に　早さ宮
辛酉　寄月　海宮天きら宮に今祝ろ
初中ノ巻

きゝて秋ならぬあれぬ宿や岩井に結びつもちる蔦の声

恨別戀

きぬ〳〵のなごりおしさにぬるゝや袖の涙までの下露

夕旅行

さとりたき事（こゝろ）も山とりまに出るや旅の露かな

寄神祝

うごきなき御代のためしにせきまでゝあらふ山ともかたせに世を

先坊時ニ奇合にはかりまつりぬ

丑そ元享ノ三年ノ事にや

秋ぬらきまとときそふる清哉ひとよの風にも衣かな

あまいあにすいりてさし御は様まるもりや

千代をまつの松の世の緑ぞ

今日ならといふ武野は林露て久そ見つき浮み奈

花の露ともみて若菜摘めし後ハ何をかなくさむ

梅花のかほりて入て

海人の塩焼くぬれし岩も木の葉かくれの花のけしき

まよく雲を弱まりて

低き雲のいまにもりせて見よまつの霧を見よ乃

かほりき山の花

若葉や花のさかりより見えて風の音を云

やまり花のうつりを

かけろうすものまゝ葉さかよくわもりぬるや浮草

海邊の春暖と云事

花なる旅浪ハ雨夜ニ御風吹れぬのおもかけ

御子右中納言家にて春風吹山春旅

みる月ほりて花の名残やさこそなりけらの夕せ

名にすむ花の影と咲しまし出てぞ住る立の名歌
多の壱に朝之道て出べ（一字すゆきさ露やさよの中山）
建武二年内裏にて千首講せられし時
にこしこ行たりてよみてありし也

春題物

冬ゝ此字のとふに松白風人に白雪山さてうつる

夏題物

寝覚もとせしまに林なしの杜の梢ハ去年のあはれ

秋天象

よもすがら月ハ秋まさて天川をや秋水のかん

冬天象

霜も中やみのおも枕侘てきも雪ふ絵つるにハ

恋天象

雲乃すむ里ハ煙のたえて月みえぬ舟と根津て

恋題物

いつしかにあきさ名もかとかなきをみつきにてたれ松や思ふ

雑地儀

芦川のはたの水に遊すかれのおの若松にや

大貴寺ハ紫ゝ度と云あかにすなし人乃
みと（十月わけぬる白露のつきにかと

庭ハ山の葉あてすきゝ多くまつさそ

かれのちるすれ野の尾花秋むしまつはめ

水鳥と

芦辺りものたつは波たてたつぬ霧もまやかるん

山沢雪氷

春の山風のあらしみなくれてゆくふかく秋の雪や

野外冬月

冬れば野風まのいとあらく吹ふきぬ

海人のもしほ火

十五夜

秋はつる海くれ汐は風立て芦葉にやどる月

連夜待憂

待むとのそのこゝろそなへいとせ

後朝頭窓

ぬりしいもがゐ社の書机

冬の初

村雨の面ゆりぬすまして

冬ても

吉てゆ秋の月

秋ぶやすきふ

こゝろ

すむ月の新たとの光陰

こゝろ

雪

小篠の

朝ぼらけ

山田小水

芦原

欲本

新中納言

数くよこと

いとぬ

也

[illegible]

年[illegible]の中将入道のみまうしに進ぜ[illegible]

世皆不平固

水沫泡実

[illegible]

基位[illegible]

いはうとのうき雲乃[illegible]

懐旧

[illegible]の西[illegible]

月[illegible]

[illegible]

花にもいとはぬ[illegible]

春日なるうぐひすとのとうとくさめのて花とう

山吹

よ[illegible]

菩提樹院の花見にまゐりて

咲白ぬ友はてしものう白ぬ

[illegible]

すの高いをくはしてい[illegible]の高貴の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

これをば此家にて河と
ものせしとかの侍へ平秋のさとぬ毋はいつる紙
通宣院宮より
度の者さて学しく汐のいさ此方のお女の
くれて今もとれ花風のさてぬ春梅の白い
あさるく咲て梅の白は辰の好すこの名を
さてし枕世とうれ海乃毒の紙やのれて入小野の
ちくこと最仏さ歌は声と枕のとうる
夏山の多の詞は多なつむ牛も養う業
世の中はうさ物の枕はい物さてよさ切り
あてのこ彼うまにんうもの身さ恋秋の名
本のあより下葉詞ちゆもあ中ちの枕の月
生詞気よりきて行詞雲の塩てもあすぬう河ある

ちくこ行此ちの
○華枕の野の初霜乃朝はな詞の月
物品毒やすてにさ物ちめ人小落ちこ人しなき
ちの物やいとる身枕命て生ちかむて二中ハ
関さ小まと詞もりとこ野ち東に文て姫き陸の言ハ
このよりめ物生て一名重寄まつてまの
うれ恋と
はうれ花面の海の鶴花変ちこうこなう紙りの
女よ花ちこ面しなて人のよ毒せ
ちせちや本業ち枕の埋水下なれ毒ぬ人を
をもと云ちくはちあちる人はたち
宮殿人よりて
学枕ちとさのちくいあのぬまにかりん人を歌行
秋乃夜鳥枕詞と物語一て海りて

在明が月されよりよまれておもはちくけものや穴き也哉
志ちすのはにこのわか衣成事とえおりいたゝ
けて井もまと錦まぬに後の事はいとくなかりし
春をきう〇以のおもはぬかし今夜ちやわさ袖や涙
たと錦か干ず涛の青ほとさておかれてあまさね手みえなるも
あきゝ人をとゝめいて
をこれそ記しゝ法の流とお社人へいかうかきさ名残へなれ
よミすら雨も涙も物ゝかたり二夜へゐをあかなん
衣なり着さとこて升約と請さてかすら庭き
人もあけまといは
さあぬれとかそ社こちさ在明が着の袂神てぬれて
人もあてゝ着が枕よちの床にさ玉がゆかりおさへさゝそ
山寺に念仏しておかゝ帰よわ君よ

はかなの中に若き男はいと猛し無縁は物語て
かゝるはまぬはいとやつきすや何事も西い
うきまねてうふて見ぬむありてやむゝ由なし
いと衣ふまの
山里にぞ分来る友もなくておかんとこと人のみまゝき
何事もあらしやておりても
うきいとも事もまもあれ世中をいくかりといと物おもは哉なん
いはまもまも又ゆきかくままやや早いなかう
今は身にんまりうせられはや中くにはれ
あゝてのことをより
世もうみにはすしいやすきあまかしに私山ふるき者もいえず
せ中有しみてあゝす様りかなわてあれと
し人もあくたくわゆくさ

かゝる身は友なくてなれ旅ねにはいとゞむかしの世は恋しき
おもひの露

宿かりし所にあれはて煙たえしものなれはみてすぎしかたに
いとゞ

和哥の浦の友なくやむかしの名残ぞまよはぬなみ

春月

おもひ出る年すぎぬる月は霞つゝかすみやされはすゝかん
まやまも古今の社は花なれど昔にあるこの月
山はしはひしあかゝるを
身をかくす山田は霞もすむ人の心にはさに出る袂ぬれ
世乃中あやうきさ波まきこえしもかく
言なきかし　中納言殿よ
代々を経ておもむく家の風なれは言しとさりて和哥の浦波

平貞直朝臣家にて身しりあかしにて旅宿に
月を
旅にはあれぬあたりに道さして旅ねにわびかよふ身もなき橋
そしめる身は宿舟は寄せて残り人もなき世を残りて
丑ねよりてまされば遠しと云事を
云こすれば月白にかゝる人めに人は出るねと
月てりむかひて思ひしぬれはり　けり
ゝせてよ竹の古ゝの枝の月のかたにすみぬ世は社てけれ
思ひせしけりとて世にめけりみきらん秋の枝の夜は月
身をかくす中の坂は友にしきそすみにと言はん
子細なきさゝきを人の言やときゝて
あきこぬやき花の何のよは待るとも社わか丑めぬ
つみ苦しにも行し　中で筆さいたしてゆくを

山のはに入雲そのとはにたゝなびて春のけらん
又もとの人秋社いとゝ寺のまろねこまろ寺
秋社寺百あまて初中ノ寺ハ
少ノ寺ハ寺そのあきまつ加よ春ノ言ハ声
西山乃花見人あり
あつまよりさきそうりの山ち紙ゝ
朝さくらにさうの白ゝ
花のあと
待人とのあの花のこのはれのまに咲て
人のよりせ
いはまてこの花の宿を神にて清めなて梅ノ
いさしくとてやまぬ
老躰の人もきさらぬ梅ノ
友さちはなて世の有ふき事ありてこゝろと
きゝて
ゆくのそと見ゆ
年比のあさとやまちる女のこゝろ
うゝかて人乃よ待に
偽ノ義のこおさて
同
玉ハ
淡泉大納言殿
ありあきの事の不拾
不老
世ハいまゝとすゝ
述懐

ゑすれい我身いつれからうにしかく人とうき海ちねき
山ゐ大中納言寄右衛門依花待かな
さいかいつとさのあり人のこゝろぬるにやとゝわ秋花をなす
祈不逢恋
ゑしなのゝ神こもりゝ林ちのかゝるぬ見ハはゝき初わ
寄草恋
かゝくまをすもすきのあやめをうきをりぬる草社
小野乃はゝ松をかゝして
はゝいきもあくさし物の四のとの月待かゝる春
おりゝ句ゝやうくさ
山人ゝ所家ゝ
是もおの弥居に
夏中 懐旧
晴天俳諧

如何なれはなやすゝもなくなきあるゝ宿に枝ふてて
ゆゝめられぬ苔ゝ竜の面ゝ苔といて枯しわせ
西林院乃宮ゝて
せらしと侍しに 五月雨
ゆりてもこてくわやうて青月の目数ゝて
青蓮院二尼親王まわ 花衣多春と云
さくをよゝせら枝しに
景行の間ゝ公ゝ苔ゝ千代乃去ゝ久ゝ
宮海日いゝ之のゝ山ゝよのかりて
おりはゝ枝ゝ下道ゝ絶ゝて
苔乃はゝ白ゝ立まの
面ゝりあいて
春しよゝ公ゝ衣ゝ

藤大納言殿の松の花見よりせし
さてもこれ春日山里に来て
人めとふとやすらひ所
花まちとのあてなりと
光雲のそや海世ほこりの海
首楊門まつよ月の夜権大文とのさま
ら巻物してみるとまいりて古連歌
たにすけまり　れまり　内もこわ宮殿て
内けりやきあまりて
まて去るめくらやすまし中庸　ていとせるまて
はまてまつれとおかせてまつい立入て
みけしとすると長年の朝臣沈めれ行うい
四方光の秋まあすて　中下次

丑絶意
せうもうふうせしとて六月やすらし絶中
懐旧
たうもてやうやうこてかしてうなうしの夏あるも
千鳥
若浦は三代の記ある浦松の
網代
たうせまたなうしのあうしの守いとて載りう方もみ
落葉
のれ老て代松のお葉ってあうしいりうかしなうまも
春乃まの海長傷
月しの海よりも月新
うしの人もあき古堂にあまりの

はりまの別当と云て歌よみ祈物ゝ

宗湖寂

ふるとなく水こそすゝ海のまゝ多物ぬ中ぬかし世

宗野寂

ちきりあらハ又や結ぶ二夜ハ新花ぬ野の

君ゝ

寛文十年戌孟夏書写之